

会報 いづ高原げん



 **伊豆高原親和会**

静岡県伊東市八幡野1208-95 TEL(0557) 53-1122 FAX(0557) 54-4222

二〇二一年度親和会総会報告

二〇二一年度親和会総会は、五月二十九日（土）に開催致しました。昨年に引き続き、新型コロナウイルス感染症防止対策について、ソーシャルディスタンスとして席の間の距離を二メートル確保すること、会場の換気を十分図ること、全員マスク着用、会議時間厳守、の下で開催いたしました。

総会の参加者は五十三名と例年の半分近くになりましたが、委任状参加が千九十一名で、合計千四百四十四名となり、総会は有効に成立しました。午後一時半に開会した総会は、予定時間内に終了しました。



総会の様子（八幡野コミュニティーセンターにて）

最初に二〇二〇年度事業報告と監査報告があり、審議の後、拍手で承認されました。次に、議案第一号が審議され、委任状での賛成が七百七十八、反対が六、白紙が三百七、これに出席会員の評決を合計して、賛成多数で可決されました。議案第二号については、委任状での賛成七百七十九、反対四、白紙三百八と出席会員の評決を合計し、賛成多数で可決されました。最後に理事長より挨拶し、閉会しました。

※議案審議を通じて出されたご意見、ご質問は以下の二点です。（○は質問、●は回答）

○弁護士に会費未納者のうち百二十三件の請求業務を依頼したとありますが結果はどうでしたか？会費未納者は減っているんですか。

●顧問弁護士に依頼してから減っています。昨年弁護士より過去からの未納者に対して請求してもらいました。請求した事案の百二十三件のうち三十五件から支払いがあり、残りの八十八件は三年以上の未納者で全体の三〇%余りです。未納率は近隣自治会に比べる小さいと言えます。

○伊東市のインフラ整備事業は我々の対島地区ではまったく手付かずで大変遅れている。我々の生活の中で生活排水や下水処理の必要性が高まっているので、伊東市には抜本的な対応策を考えて予算を最大限活用するよう働きかけていただきたい。そのためにも私たちの地域のなかから市議を送り込んでいく事も考えたらいかがでしょうか。

●親和会是非行政地区なのであまり恩恵を受けていませんでした。固定資産税や都市計画税をたくさん納めているのにこれはおかしいではないかということで、これを活用するよう伊東市には働きかけています。



飾らない美—スカシユリ

伊豆高原の東に広がる海岸線を、細い道に沿って歩いてみると、夏の頃にはオレンジ色のスカシユリが、岩場に陰に咲いているのを見つけた事が出来ます。

波しぶきを受けながらも、スカシユリは咲きます。その生命を岩陰で極めるのです。その場で咲き誇る命の輝きを、機会があれば足を止めて見つめてみて下さい。

二〇二一年度親和会役員

理事長	市原輝夫
副理事長	山本茂
副理事長	宇中道雄
副理事長	徳本政幸
副理事長	丹羽忠昭
理事	武内博
理事	高橋亘
理事	小川たつこ
理事	山田華恵
理事	吉田勇
理事	牧島珪
理事	井上順子
理事	株式会社
理事	伊豆急コミュニティー
監事	株式会社静岡銀行
監事	鈴木恵子

親和会部会報告

総務部会から

役員会報告（毎月第三火曜日開催）

（二〇二一年一月～六月の主なもの）

*審議事項

●二〇二一年度総会について

日時・開催場所・提出議案等

●二〇二〇年度決算報告（案）及び

二〇二一年度予算（案）

●ヤスデの駆除と蔓延防止策

●域内交通安全対策

●会費未納入事案対策

●伊東市と連携、空き家対策の推進

●浸透池の樹木伐採対策

●はみ出し樹木対策

●役員の選任について

*報告事項

●各地区連絡会内容（毎月）

●各部会活動報告

●親和会会費納入状況（毎月）

●事務局活動月次報告

●伊豆高原自治会連合会及び地域創生

協議会活動報告

●夢プロ活動報告

●メガソーラー問題について

なお、今年度の業務委託費の算定を過少に見積もったため前年実績比で不足することになりましたが、予算総枠内での消化に努めていきます。

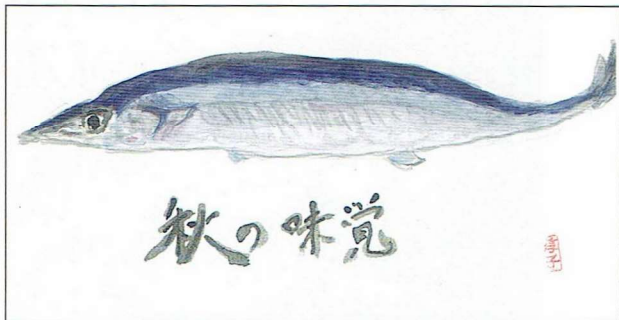
道路部会から

二〇二一年度の道路補修は、工事管理費用を除いて、前年実績より九十万円ほど少ない千七百万円の予算を組んでいます。レミファルト等の簡易補修を拡充することで前年度と同等の補修を行う予定です。レミファルト補修については、部材を道路の穴やへこみに充填するだけではなく、充填する部分に固着剤を入れ、レミファルト部材が安定するような工法を実施し、補修箇所をより長持ちさせることで費用の効率化を図ります。また、亀甲状にひびが入った部分について、従来は費用のかかるオーバレイか打ち替え工事で補修していましたが、今年度はひびを埋める工法を一部取り入れることを検討していきます。見た目は悪くはなりますが道路自体は補修できます。これらの方法により、効率的に予算を消化していきます。

なお、補修箇所の決定については、従来通り、九月の役員会で道路補修案を審議し、十月以降工事を行っていく予定です。

またカーブミラーの設置や道路清掃についても、これまで通り、道路予算の一定額を割いて対応していきます。

道路を長持ちさせるためには、軽微な痛みは小さなうちに補修することが重要です。簡易補修は低コストで行えますので通年で実施していきます。道路に穴が開いている場合は事務所までご連絡ください。



イベント部会 絵手紙の会より

会費納入のお願い

親和会会員各位には、毎年会費納入にご協力頂き厚く御礼申し上げます。

ご存知の通り、親和会は伊豆高原分譲地の大半をカバーしていますが、管理会社による管理運営とは異なり、会員自らが親和会のテリトリーを管理運営しております。従って、会員皆様の会費により全て運営され、当地区内の道路及び側溝補修、街路灯維持管理、浸透地整備、域内清掃、ごみ処分、親和会運営事務等、より良い環境を整備するために使用されております。

ほとんどの会員の方は期日迄に納入頂いておりますが、一部の会員におかれましては、何らかの事情により期日迄に入金頂いておりません。会員の公平性を期するためにも、また会員の義務としても、会費納入へのご協力をお願いいたします。



城ヶ崎文化資料館を訪ねて

◎城ヶ崎文化資料館の生い立ち

城ヶ崎文化資料館（以下資料館と略）は、一九七八年五月に現在の地にオープン、地元の名士、平澤正太郎さんが開設、その後ご子息の哲さんが引き継ぎ、現在も館長を務めていらっしやいます。初代館長の正太郎さんが、昔から集めた様々な古民具や美術品が、伊豆の観光のために役立てられないかと考えたことが、資料館の開設につながりました。

当時の伊豆高原は、一九六一年に伊豆急が開通、伊豆高原の別荘分譲地としての開発がスタートしてからも十数年しかたっておらず、美術品などを展示する施設は、一碧湖の池田二〇世紀美術館しかなかった時代です。現在資料館のある場所も、伊豆高原駅の改札口が海側にもあったにもかかわらず、周辺は雑木林と雑

草の生い茂る空地が一面に広がる寂しげな場所でした。文字通り、伊豆高原の草分けの観光施設として発足したのです。

当時の日本は第二次オイルショック直前の経済的にも余裕が出てきた時代で、古民具がブームになっていることに着目、古民具を展示してお客を集め、伊豆高原の観光の役に立てようとの意図でしたが、周辺に他の観光施設はなく、観光客の増加とはならなかったようです。その後、人形の館や花吹雪がオープン、徐々に現在のような賑わいになりました。

◎彫刻家、重岡先生作品が

館長のお父様正太郎さんが彫刻家を志して上京、しかし志を果たせずして伊豆に帰ってきたものの、同郷の重岡先生と知り合い、重岡先生がイタリア留学を決意した時に、お父様がこれを資金面でも支援しようとして重岡先生に彫像を依頼しています。その作品が資料館の草むらの中に今でも佇んでいます。先生の作品はブロンズ像が多いのですが、資料館にあるのは写真にあるように塑像です。若き頃の重岡先生のイタリア留学への意欲を感じさせる美しいフォルムが印象的です。



◎資料館の展示物

資料館の主な展示物は、古民具と美術品です。古民具は、伊豆で使われた漁具をはじめ、平沢父子が日本全国から集めた生活用具です。明治から昭和を知らない子供たちには新鮮に映り、昭和の人たちには懐かしさがこみ上げる民具です。ラジオやアイロン、天秤や算盤に加え、江戸時代からの消火器である竜吐水など、江戸から昭和までの民具が展示され、多種多様な展示となっています。この乱雑さが、国立博物館のような整然とした展示物とは違い、身近で親しみの持てる展示になっています。加えて、館長が在館の時は、館長から直接説明してもらえるので、収集した人の想いが直接伝わってきます。



美術品としては、江戸末期から明治時代のガラス絵が一級品です。ガラス絵は十六世紀のヨーロッパが起源で、インド、中国を経て日本に伝来してきていると言われています。ガラス絵の展示では浜松市立美術館が有名ですが、日本では資料館で見ることができないというような作品もあります。展示しているガラス絵は収蔵品のごく一部というのが残念です。今後はヨーロッパのガラス絵も展示したいとのことでした。

◎伊豆高原の文化拠点として

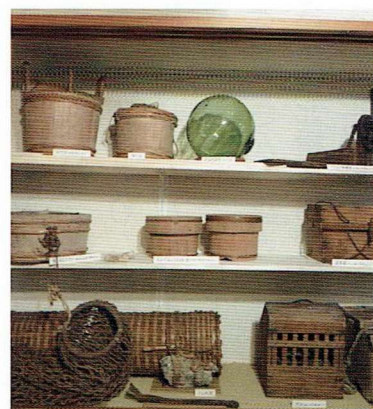
リニューアルオープン

今年の五月、伊豆高原の新たな情報発信の場所として、資料館はリニューアルオープンしました。入場料は無料、誰でも気軽に立ち寄ることがができる場所として、伊豆高原のいろいろな観光施設の案内も含めて、

伊豆観光の役に立ちたいとの考えです。そのために、支配人として安田保さんを迎えてマネジメントを依頼、多くの人が集まれる場所を提供するとともに、多くのアーティストの活動拠点として活用してもらうことを目指しています。伊豆高原には、文化的な造詣が深く、様々な知見やキャリアをお持ちの人が想像以上にたく

さんいます。この人たちとの繋がりを得て、資料館の場を通じて自由に発信してもらい、多様な文化性を実現することが平澤館長の想いを実現していくことにつながると安田さんは語ります。一方で、地域の方々に、様々な活動の拠点を提供することも考えています。

また資料館以外の施設を利用することで、資料館の豊富な収蔵品を活用し、伊豆高原のいろいろな場所で、伊豆を訪れる人たちの目を楽しませ、地域に貢献することも考えています。例えば伊豆高原のペンションなどの宿泊施設と協力し、それぞれの施設にジャンルを変えて収蔵品を貸し出すなどの方法で、それぞれの宿泊施



設の個性を発揮した展示を進めていくことも考えているようです。まさに伊豆高原の文化センターのような機能を果たすことになるのではないのでしょうか。

◎地域の子供たちとともに

「最近現代アートの展示をやりましたが、伊豆にいて、このようなアートの触れる機会はまずないでしょうから、地域の子供たちには新鮮に感じてもらえたのではないかと安田さんは話します。伊豆高原の子供たちにとって、資料館がアートに直接触れる場所にならないか、という資料館の想いを強く感じます。常日頃館長が子供たちに説明するときの優しい語り口が、資料館の地域の子供たちへの想いを物語っています。ぜひ城ヶ崎文化資料館を訪れてみてください。

(取材 親和会広報部)



まなびやで語り合い

子ども未来プロデューサーを育てる

第二地区 薄羽 美江さん

城ヶ崎文化資料館で『I・T・O まなびや Station』を主宰し、地域の人たちとの対話を定期開催しながら、「子ども未来プロデューサー」を育てようと活動している薄羽美江（うすば よしえ）さん。親和会第2地区の班長さんを務めながら、世代を結び、地域の未来を考える、その創造的な活躍ぶりを紹介します。

◎薄羽さんと伊豆との出会い

薄羽さんのお父様が病氣療養のために、熱川の温泉病院に転院したのは、今から八年前。以来、週に一度は東京から熱川に通い、お父様の看護を重ねてこられたことが、伊豆の魅力との出会いだったそうです。きらりと陽光に輝く伊豆の海、緑に萌える山々、草木豊かな単線線路を快走する伊豆急、その車



窓からのぞむ伊豆ならではの光景。通うほどに自然に心が和まされ、「伊豆に住もう」と惹きつけられたとのこと。二〇一六年の暮れに出会った伊豆高原の一軒家は、それまで夢見ていた生活様式・畑を作れる理想的な環境だと運命を感じて、即断即決。それから、一昨年の大晦日の朝にお父様が旅立たれるまで、伊豆大島を身近に眺望しながら海岸線を車を走らせ、ほぼ毎日、熱川へ。通いの時間が短くなり、お父様のターミナルケアを手厚く、ともに過ごす豊かな時間に恵まれたそうです。

ご葬儀は白田のお寺とのご縁を授かり、「御住職様とお嬢さまの尼様が一緒に混声で読経をしてくださり、ありがたくて涙が零れました」と薄羽さん。稲取の美しい海の光と風の香りあふれる中に、お父様を見送られ、「それは、東京ではあり得ないことでした、自然豊かな伊豆に導かれたこそその恩恵です」と、感謝の心を語られています。



◎シロクマと共に東北の被災地へ

薄羽さんの仕事仲間にも、リサ・ヴォートさんがいます。リサさんと薄羽さんの関係は、筆者から見れば、まさに「禅の世界」のように興味深く、お互いに自由に独立して生きていると強く感じさせられます。三十年も続いている親友というのも肯けます。

仕事を通じて、ジャズシンガー、ナオミ・グレースさんから幼なじみのリサさんを紹介された頃、薄羽さんはフリーアナウンサーの仲間と会社を設立。一方、リサさんは、大学教授職にありながら、世界中を旅するバックパッカー、写真家でもありました。そして、薄羽さんとリサさんが出逢って後に、リサさんは北極を四度旅してシロクマ（ホッキョクグマ）を撮影。

その一万五千枚もの北極写真をともに、シロクマから啓示を受けたともいえる持続可能な社会の創造を目指す『ホワイト・ギフト』北極からの贈りもの』という写真展を薄羽さんがプロデュースしたのでした。

二〇一一年三月に東北を襲った東日本大震災には心を痛め、翌年、被災地からの要請を受けて、リサさんとともにシロクマの写真を持参し、那須ヶ裏磐梯く塩釜く仙台く大槌くいわきと訪問。最後が石巻の開催で、被災を免れた地元公民館と大学の図書館でホワイト・ギフトの写真展を敢行。昭和40年代に建築された公民館のホールの四方にぐるりと白い壁を張り巡らせ、白色一面の写真展示ギャラリーを作り込みました。そこには、訪れる人々の驚きの声とともに、新たに真つ白な気持ちで家族写真を撮影できる環境が誕生したのでした。

「多くの人にご来場いただき、その場で子どももおとなも、自由に絵を描いてくださいました。被災後、まだ一年しか経っていない中、色を何色も使って、とても伸び伸びとカラフルな絵

が描かれていく様子に感動しました。震災直後の希望が見えない状況にもかかわらず、自由な線や伸びやかな明るさが溢れていました。それ以前に東京の六本木で同じ試みをした時のこと、子どもたちはグレーや黒色を基調にした、四角い絵を描いていました。豊かな生活を送っていると思われる東京に暮らしているのに、躍動感が感じられない。なぜこんなにも違うのでしょうか。自然に恵まれて育った子どもたちの絵は、なんて生命力を秘めているのだろうと気づくことができました」と薄羽さんは言います。

◎地元の御神事との出会い

伊豆高原でのある日、薄羽さんが遭遇したのは八幡宮来宮神社の祭祀の行列でした。口紙をして袴を付けた人たちが御神輿を静々と担ぎゆく御神事の様子は、江戸前の勢いあるお神輿とはあまりにも違って、驚いたとのこと。

なぜこのような文化が八幡野の地に残っているのか、知己を得ていた地元の人から城ヶ崎文化資料館館長の平澤さんを紹介され、当時閉館していた資料館を早速訪ねたそうです。

「平澤さんは、お祭りの話だけではなく、伊東の各地域の歴史をよくご存知で、炭焼きや、やまもも採取による地域産業の歴史、加えて資料館の貴重な蒐集のことなどを教えてくださいました。私のような移住者が、地域の歴史や風土を学ぶことは、毎日の生活をより豊かに深め、これまでの人生を学び直す機会となっています」と実感されています。



◎地域の人たちとの出会い

五月にリニューアルオープンした城ヶ崎文化資料館。その運営コンセプトにある地域との交流・活動の一翼を担っているのが、薄羽さんが主宰する『ITO まなびや Station』です。資料館の中ほどに、写真にあるような白い空間が設けられ、資料館の江戸時

代の木版画『金のなる木』や教科書、そして、シロクマの実物大フィギュア、持続可能な社会を作る『SDGs』に関する資料が配置されています。真ん中には大きなテーブルと椅子が用意され、毎週、未来の子どもたちが生きる社会や地球の課題を、地域住民が集まり、皆で討論しています。おとなが子どもたちの発想から学ぶことも多く、未来ヴィジョンをテーマに真剣に向き合い、知恵を出し合う子どもたちの声に耳目を澄ますことの大切さを薄羽さんは強調します。

◎子ども未来プロデューサー

このまなびやに集つ子どもたちは、生き生きとテーマに向き合い、自然体で自由に発想をめぐらし、対話しています。

薄羽さんは、三世代をつなぐ叡智の交流が生まれるような教育プログラムを作りたいと考えており、これまでの人財育成のプロの経験から、次世代を担う「子ども未来プロデューサー」の誕生が目標だと語ります。



子どもたちが学ぶ場は、学校教育や家庭教育の他にもあるということ、地域のおとなたちが繋がりがあって、未来創造を語り合うこと。子どもたちを見守り、自立的に学べる対話の場、表現する・創造する機会が重要になっていくと考えているのです。まなびやを通じて、子どもたちが、そして、おとなたちが、近未来の社会を自ら生きるために、自分の幸せを掴みとるために、学びあい、次世代が自分の未来をプロデュースできるようにしていくことを期待しています。

今日も「まなびや」は地域のおとなや子どもたち、親・子・孫の三世代を集めて賑やかです。そんな人の輪の中にいて、子どもたちを見つめる薄羽さんの眼差しが優しく印象的でした。

〈取材 親和会広報部〉



ITO まなびや Station

<https://www.ito-manabiya-station.com>

全てのゴミステーションに防犯カメラを

ゴミステーションでのごみの不法投棄や分別せずに投棄するケースが見られます。この問題は広報や地区連絡会でも取り上げていますが、一向に減少していません。その対策として以前から防犯カメラを設置しようとの提案がされてきましたが、費用が多額に上ることや映像の管理方法を巡って設置を見送ってききました。

この度、伊東市は「地域の自主的な防犯活動を促進し、犯罪等に強い安全安心なまちづくりをより強力に推進していく」として、防犯カメラ設置に特化した補助金制度を創設することになりました。補助率はおよそ九〇%で、補助額は一年につき三十万円以内ということです。親和会にも伊東市から設置希望調査の依頼がきています。

親和会としては、全部で五十カ所に設置しているゴミステーションについて、全てに防犯カメラを配備する方向で進めていきたいと考えています。しかし、補助金制度を活用しても予算の関係で、年間配備数は限られます。従って、最初は試行的に配備して、カメラの精度や機材管理手法、また映像の管理方法などについて検証する中で、運営ノウハウを確立していきたいと考えます。その上で漸次、会員の要望に従い配備を広げていきます。

九月一日 総合防災訓練速報

伊東市総合防災訓練が、九月一日午前九時より実施され、親和会も参加しました。今年も新型コロナウイルス感染拡大防止のため集合訓練は中止となり、家庭内訓練の実施にとどまりました。

午前九時より、各家庭でシェイクアウト訓練を行い、救助の要不要を表すOK旗の掲示訓練を行いました。今年は掲示率が三十九%と、昨年と比べ三%減の掲示率となりました。

十二月防災訓練について

例年通りの場合は、十二月五日（日）に伊東市地域防災訓練が開催されますが、今年もコロナウイルス対策のため、十月末に開催要領が明らかに予定です。開催要領については、十一月に親和会事務所宛お尋ねください。なお、親和会ニュースでもお知らせします。

各地区連絡会

開催（予定）のお知らせ

十一月においてもコロナウイルス対策が継続していることを想定し、七月開催の連絡会と同様、八幡野コミュニティセンターで開催いたしますので開催日時及び開始時刻をご確認の上ご参集ください。

なお、緊急事態宣言発令中は、八幡野コミュニティセンターが使用できませんので、その場合の開催については事務所までお問い合わせ下さい。また、電子掲示板及び親和会ニュースでもお知らせします。地区によって開催日と開始時刻が異なりますのでご注意ください。

第一地区	十一月六日（土）	午前十時
第二地区	十一月六日（土）	午後一時
第三地区	十一月十三日（土）	午後一時
第四地区	十一月十三日（土）	午前十時

年末餅つき大会開催について

毎年多くの会員の皆様が参加され、年末の親和会の恒例行事として定着していた年末餅つき大会について、今年も昨年に引き続き新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止させていただきます。

案内図



昨年9月から開設した電子掲示板のQRコードとURLは下記の通りです。



伊豆高原
親和会
電子掲示板

<https://izukogen-shinwakai.org/>

（広報部会）編集委員

市原 輝夫 徳本 政幸
井上 順子 牧島 珪
小川 たつこ 山田 華恵
鈴木 恵子 吉田 勇
高橋 巨 (五十音順)
事務局 赤堀 井端